B 6

幼児グループ活動における一考察 I
―― 保育者の関わり方について ――

東京家政学院大家政　○大澤佐世子　吉川晴美　小西百合子　鈴木百合子

〈目的〉本幼児（２～３歳児）グループは、活動（遊び）を通して、子ども達の人格形成、社会性の発達を促し、子ども達と保育者が共に育ちあうことを、目的の一つとしている。近年子ども達にとって遊び場や遊び仲間、きょうだいの減る中、初めての集団活動において、新しい自己・人・物に出会うことは、重要な機会である。そして保育者にとってはそれぞれの場面で、どの様に関わり、発展をはかっていくかが、重要な課題となる。ここでは種々の集団的保育状況における保育者の捉え方、関わり方について明らかにする。

〈方法〉児童学研究室幼児グループ活動に保育者として関わった、実践活動及び、活動後の話し合いの記録・ＶＴＲなどを資料とし、関係学的に分析・考察する。

〈結果〉集団的保育状況においては、個と集団の相即的発展をはかっていくこと、それには、保育者の機能として、方向性機能、関係性機能、内容性機能が、力動的に働いていくことが重要であるとわかった。特に、内容性機能では、物の役割に着目し、物媒介による子ども自身の安定や自発性の促進、活動の充実をはかるなど、関係性機能では、子どもひとり々の活動を肯定し、受け入れ、各々の活動が交差する関係状況に着目し、関係状況の発展を複合的にはかっていくなど、方向性機能では、一人の保育者が活動の方向を決定するのでなく、補助自我として関わる保育者が、子ども達の声を伝え、応答しあいながら、全体の方向を決定するなど、に配慮して関わっていくことが、重要であるとわかった。また、これらの機能が充分果されることにより、子どもの自己、人、物との関係が統合的に発展し、集団と共に育ちあう効果が、見出されることが明らかになった。